戦争体験記

今西芳子（前原西・71歳）

東京芝区田村町に住んでいた頃でした。妹。昭和十八年十二月樺太に住んでいる甥の所に嫁に行く事になっていましたので、私が送って行きました。内地は食糧品がなく米の中に大豆がまじって入って居り、米やではさつまいもとかじゃがいもが配給になって、人数によっては二人はいつも葉のついた小さい大根を立て四つ割くらいしか買いませんでした。それでも勝つまではガマン、といつも自分にいいきかせていました。樺太に行きましたら食糧品は何でも有りましたけれど連絡船の所で調べられてとられてしまうので、持ってくる事が出きませんでした。一週間居ってかえりましたが、十九年に入って空襲が激しく警報もひっきりなしの毎日米機が銀色に編隊を組んでき、てきながらきれいだと思った事も有りました。東京湾上空で空中戦を目の前に見た時も、早くやめる事が出きないものかと思いました。くる日も警戒警報空襲とでつかれはてましたが、気をはっていたせいかかぜもひくことなくすみ、とうとう四月十九日の空襲で住いの方が焼け出されてしまい、お店の方も其の晩焼けてしまいました。屋上にしょうい弾がおちて四Fと三Fはだめでしたが、二Fはのこり焼けのこったものの、いつ又もえ上がるかわからないので、ポンプをつかって四人で一Fのガラス窓を割ってホースを入れて水をかけ、ようやく夜になって水道の水はお湯になってしまいましたが、ワラのむしろを引いてようやくやすむことが出きました。三・四日はあとかたづけで残りましたが、皆さんと別れて親の住んでいる千葉に新橋駅より秋葉原でのりかへる時に、上野方面よりきた四十くらいの男が御務めの途中人にさわり持っていたおべん当をおとしてしまい、中みはぞう水だったのでどうする事もできず、ただながめているばかり、おひるもたべられずにほんとうに気の毒でした。千葉の親の所に行き、やっかいになっていましたが、二十年八月に入って銚子に兄弟がいるがどうしているかと思い行きました。十五日だったので、今とくべつのニュースが入って今おわった所だが、戦争がまけてしまったとの事で、これからどうしようといっても、生残った命を人の為になれたら何とかがんばって行きたいと思っていました。ヤミヤははやっていた頃でしたが、そんな事のできない人はまじめに働く所をさがして、主人はボイラーマンですので聖路加病院に務める事になり、津田沼止りで次の千葉行の来るまで駅の売店で新聞を買っていたら、売店のおじさんが土地をかわないかといったそうですが、電車がきたので又くるといって帰ってきての話、今度よくきいて下さるようたのみ友人に話をしてお金の都合をしてもらい、何年かかってもかへす事を誓いようやくかへして、家も其頃はきまっていたので六畳、三畳しか取れずに、線路わきなので住んでいる内に複々線の話になり、いつも親が話をしていましたが今は憩いの場といっていますが、

年よりの集る所がほしいと口ぐせのように話をしていましたので、ようやく思いが叶うようになるのかと思い、私も足りないながらお手傳いをした事も有りました。鉄道にかかった分のお金で家を建て替えて、今度は多ぜいの人も、はいれるように廊下もできるだけ廣く取り、大工のてはいも出き母の思いも叶うことができました。又町会のある方が老人クラブを出きるようになるけれど、手傳ひをしてもらいたいけれどと話がきました。私でよかったらさせてもらいますとそれからクラブに入っております。次々と自由にはいれるようになり、会長も早川さんになり、まけずぎらいの人で二の宮が船橋と合併になってより、老人クラブに総会のあと演芸会でもやらなければ人も集らないからやるとの話が持上がり、それからおどりが出きればよかったのにどうしようとまよっている内に、西三会の小倉さんが私の知り合いに話をしてみようといって踊をおそわる事になり、総会までまがりなりにもまに合せる事ができ、それから毎年総会があるたびに、おどりで苦労をしてきましたが、私がこの地に住むようになった頃、隣によく遊びにきていた小学三年生の男の子でした。今は市議会議員になっていますが、私におばさんそうして多ぜいでおどりをやっているのだもの市役所に貸したらといってくれました。ぼくにまかせなさいといってくれましたので、それでは会長に話をして早速市役所に話を通してくれました。すっかり話もきまり開所式に市長の藤代さんがきてくれました。藤代さんいわく「あーあれあんたの所だったのか」といってくれました。前に道路の事でお会いしていましたのでそういったのでしょう。市長がすぐに出かける事になっているのでといっていましたが、行った先でお身体を悪くなって其の後お会いしていませんが、其の後は大橋市長さんになりましてより福祉課にお世話になり、老人の皆さんもよろこんで毎日きてもらっています。かえる時はいつも「あー今日も暮れたなー」といってかへって行きます。又長年老人クラブの会長をされていた早川さんを見ても、病気にはかてずに病床についています。これから先は話合いはむずかしいけれど健康の時の事を思い浮かべ、あの方を手本と思って皆さんにお手傳いをしてもらいながらクラブの事や崇敬会の事をやって行きたいと思います。今年度の敬老会の時も母は強しということわざがあるように、子供の出ようではこわがっている親もいるが話合いをよくする事、母は母の立場で強く生きてほしいといって獄舎にいる子供に母の手紙でかいしんさせた事を詩吟で唄って上げました所、自分の所に試験におちた子供を持つ、親にはとくに感慨無量だったとむねがいっぱいになったと話をしていました。又らい年其次ぎの話をおあずけねといっておきました。

母（非行少年の悔悟）

（月城）松口栄太

非行の少年囹圄に泣く
無限の悔恨思い窮らんと欲す

和歌　○宮城刑務所収容者の作

ふるさとの栗も胡桃も熟たれば
お前を思うと母の文来る

○福岡刑務所収容者の作

呼びたくも呼ぶことならぬガラス戸に
息吹きかけて母と書くなり

噫吾過てり吾過てり
終夜眠らず独房の中
頭を上げては母を思い枕に伏しても母

慈顔仏の如く我が瞳に浮ぶ

和歌　○山口県新光学園収容者の作

かくまでなげき給いぬ吾故に
日毎ふえゆく母の白髪
海岳の恩愛今始めて識る
一輪の寒月獄窓を照らす

「吟詠詩選」詩苑舎より転載

